

# ひょうごの遺跡

平成11年1月8日発行  
兵庫県教育委員会  
埋蔵文化財調査事務所  
神戸市兵庫区荒田町2-1-5  
☎652 TEL 078-531-7011  
-0032 FAX 078-531-7014

平成10年度 発掘調査成果速報展特集

## 阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財Ⅳ

と き：平成11年1月16日(土)～1月26日(火)10時～17時

ところ：神戸クリスタルタワー5階・県民ギャラリー

1年間の復興調査を中心とした発掘調査成果を、遺物・写真とともに速報する展示会も、今年で4回目を迎えます。本誌では、展示会で取り上げる平成10年度の代表的な遺跡を掲載しています。

阪神・淡路大震災から4年目を迎えていますが、この間の復旧・復興事業に伴う調査でも、いくつかの遺跡が発見されています。初めに取り上げた北口町遺跡も、阪急西宮北口駅周辺の再開発事業に伴い発見されました。その調査を通じて多くの成果が明らかになり、西宮市の歴史に新たなページを加えることができました。

また、今年度は、当事務所の設立から10年の節目の年を迎えました。この1年間に調査した様々な成果と合わせて、この10年間のあゆみについてもご覧いただきたいと思います。



北口町遺跡（復興調査）

きたぐちちょう  
**北口町遺跡**

(西宮市北口町)

阪急西宮北口駅周辺は、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた地域の一つです。震災をきっかけに駅前北東地区の再開発事業が進められる中で、北口町遺跡が見つかりました。

発掘調査の結果、北口町遺跡は弥生時代・古墳時代・鎌倉時代にまたがる集落遺跡であることが分かりました。

**開拓者のムラ**

——弥生時代前期（紀元前3世紀頃）——

日本列島で初めて米を作りはじめた頃、北口町周辺の原野にも開拓の鋤が振り下ろされたようです。

幅2m、深さ1mほどもある大きな溝が3本もあって、そのうちの2本は平行に、もう1本はそれと直角に近い角度で計画的に掘られています。何のために掘ったのかはまだよく分かりませんが、溝からたくさんの土器が出土しているのでこの近くに生活の場があったのは確かです。ひょっとするとこの溝は、集落をぐるっと取り囲む“環濠”<sup>かんごう</sup>だったのかもしれません。



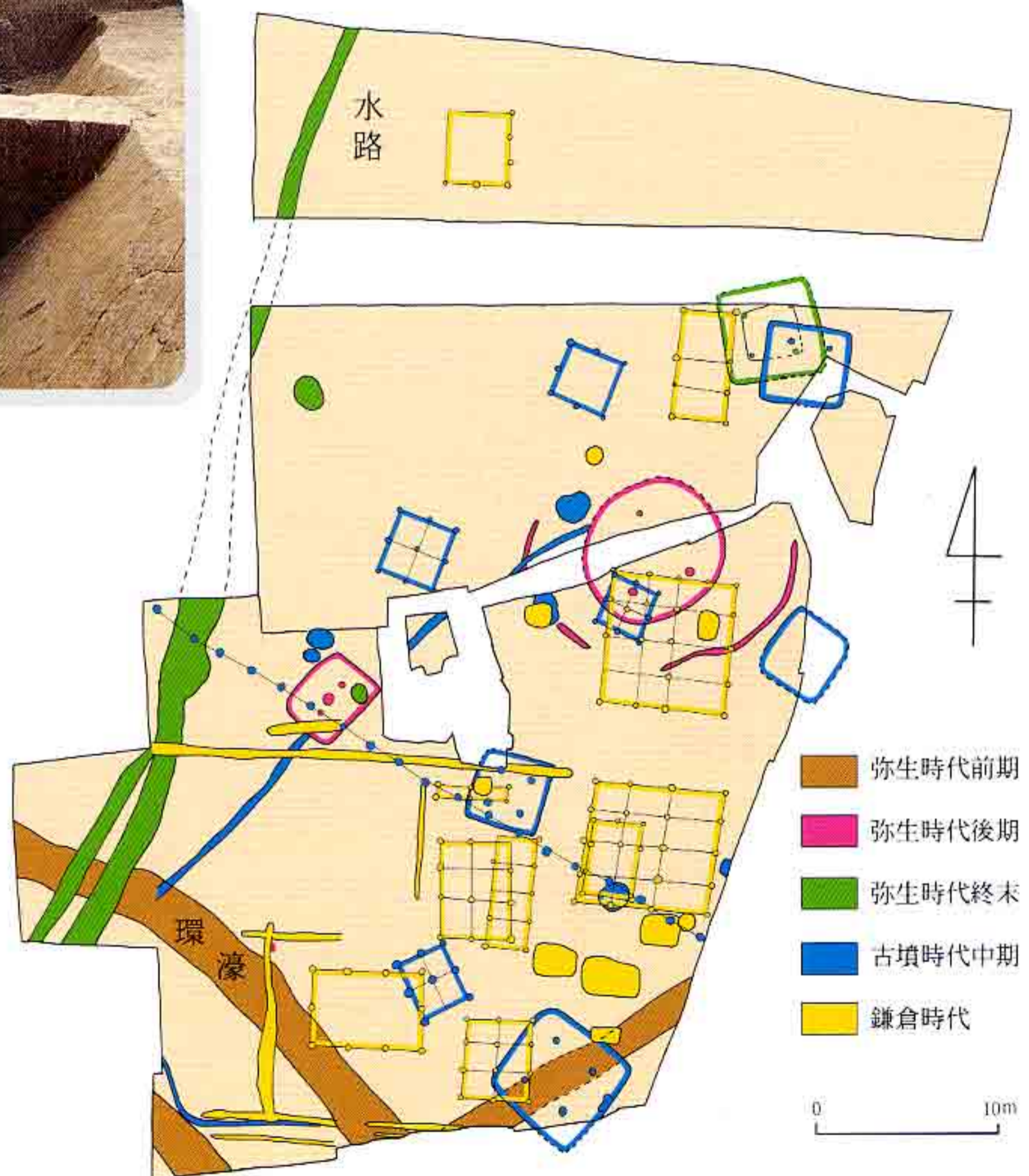
見つかった3本の溝（環濠？）



環濠？の断面



まとめて出土した小型の壺



北口町遺跡 全体図

かし  
炊きの煙り立つ家／竪穴住居群

——弥生時代後期（2世紀頃）～古墳時代中期（5世紀頃）——

日本列島がようやく国としてまとまり始めたこの頃、この辺りに再び人が暮らすようになりました。人々は竪穴住居に住み、集落の端を流れる水路の西側には水田が広がっていました。



弥生時代の水路（左）と竪穴住居（右）



一度に捨てられた土器



中世の掘立柱建物群と井戸・炊事場？



古墳時代の竪穴住居と掘立柱建物

大和政権の支配者である王が巨大な前方後円墳を築いていた時代です。人々は依然として竪穴住居で寝起きしていました。家の横には物置のような小さな建物を備えていたようです。

## 中世荘園の暮らし／掘立柱建物群

——鎌倉時代（13世紀頃）——

人々は荘園の中で生活していました。見つかった建物には、周囲に雨落溝あまおちみぞを設けた母屋や別棟の小屋などがあり、その周りには井戸もありました。平たく掘り込んだ四角い穴では煮炊きをしたのでしょうか、素焼きの鍋・釜が出土しています。

土製の羽釜はがま

## 地層が語る北口町の歴史

右は北口町遺跡の断面写真です。ここには自然と人間の営みが刻まれています。地層の観察と発掘調査の成果から、地域の歴史がどれくらい読み取れるものかお話ししましょう。

地層は大きく以下の4つの層に分けられます。

第1層：客土／現代の盛土

第2層：黒色土壌／近世～近代の耕作土

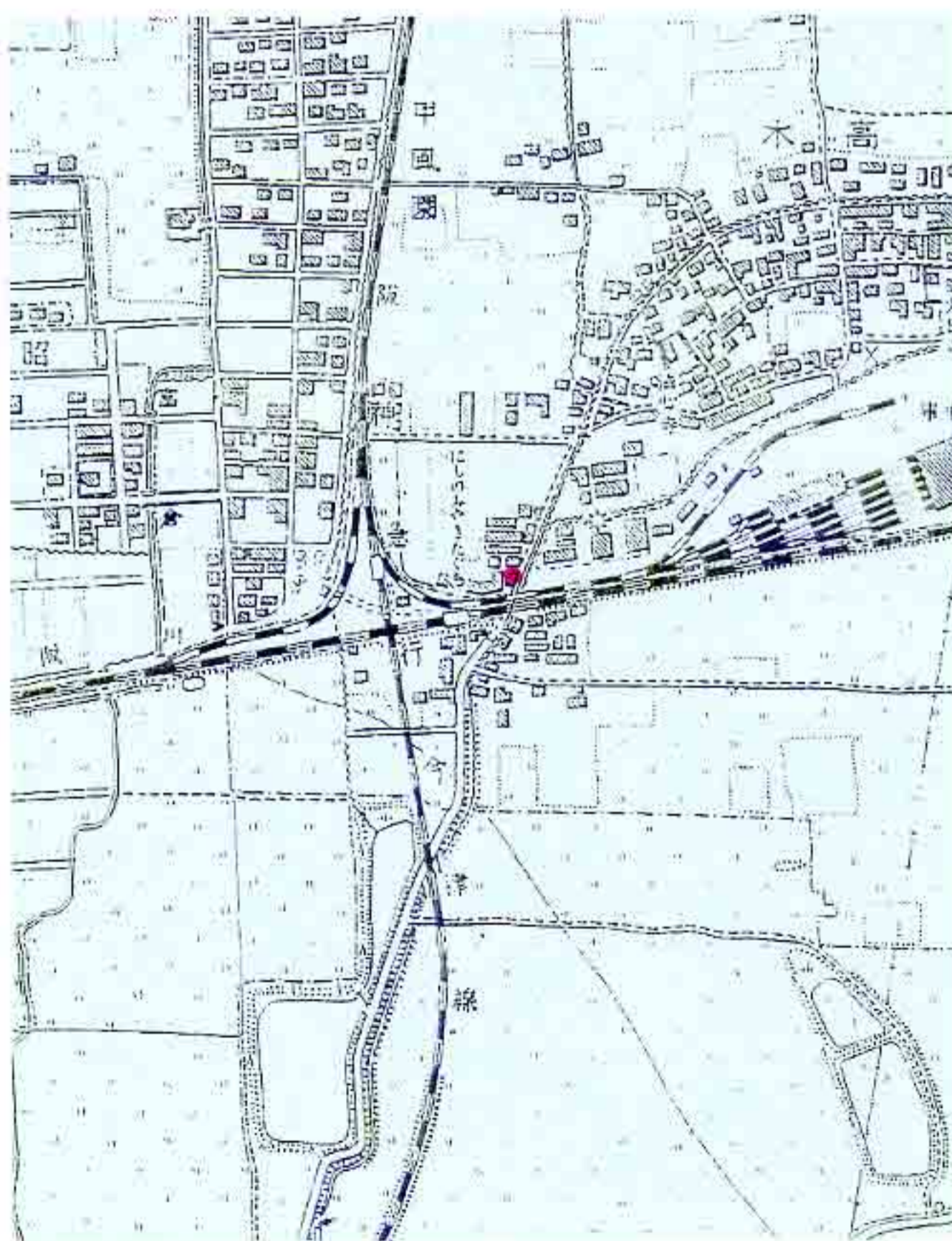
第3層：灰色砂／中世の洪水砂

第4層：黄灰色砂質粘土／無遺物層

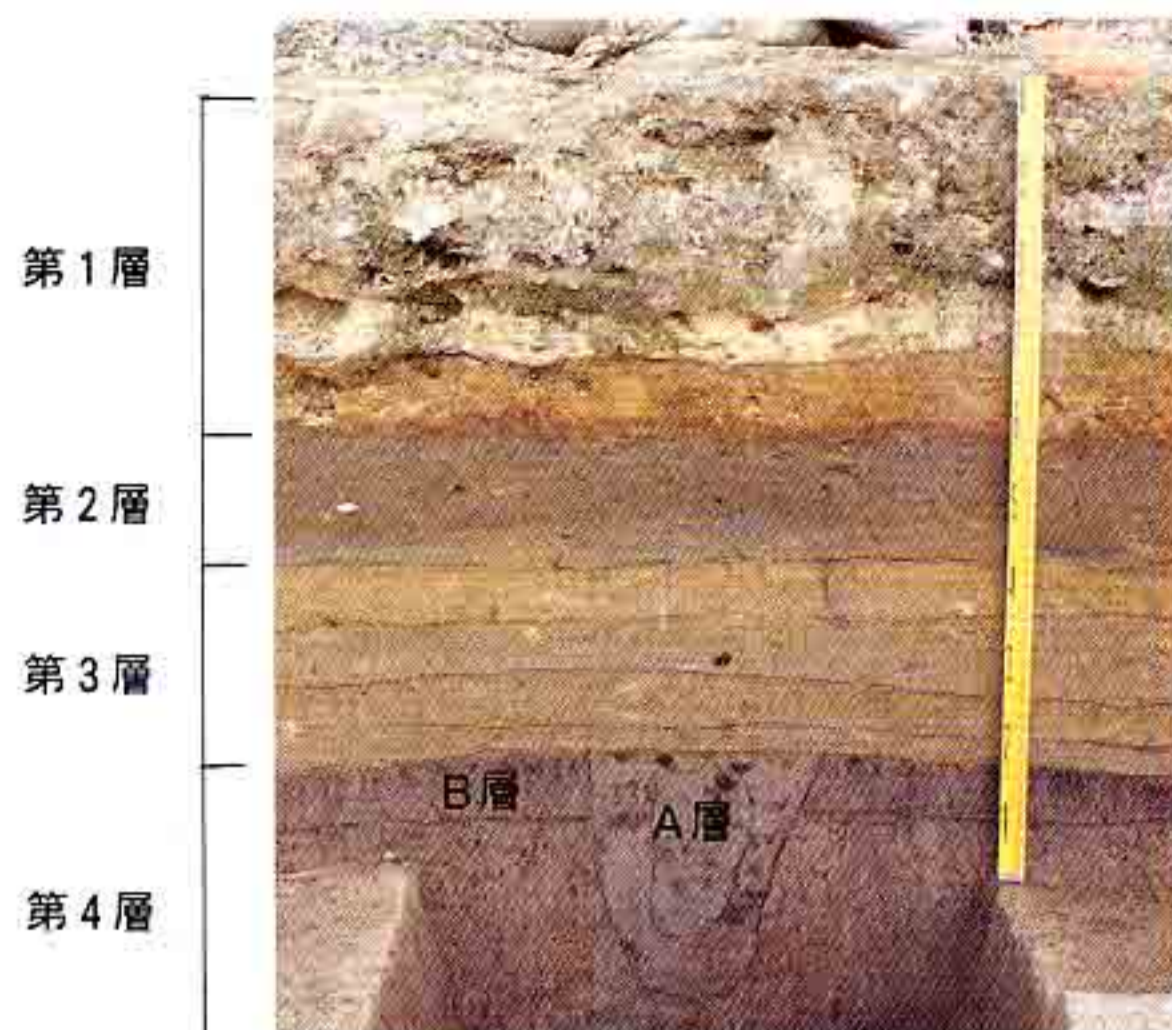
昔の遺構が見つかるのは第3層と第4層の間の面で、写真には鎌倉時代の柱穴（A層）と弥生時代の住居跡（B層）が写っています。ではこれを元に、北口町周辺の土地利用の変遷を年代順に追ってみましょう。

第4層は弥生時代より前（紀元前3～4世紀以前）に堆積した土で、当時この辺りにはまだ人が住んでいなかったので一片の土器も含まれていません。

弥生時代～鎌倉時代の住居や柱穴・溝などが見つかるのは第4層の上面からです。周囲よりも若干高く水はけの良い場所に住まいを作り、西側のやや低くなる所を水田にしていました。



昭和7年頃の北口町周辺



北口町遺跡の土層断面

ところで同じ面で見つかる遺構なのに、鎌倉時代の遺構には白っぽい砂（A層）が、古墳時代や弥生時代の遺構には黒っぽい土（B層）が入っています。これは一体どうしたことでしょうか。

平安時代から鎌倉時代にかけて、周辺の平野部は荘園開発に伴って整備されました。これによってB層に入っていた黒っぽい表土層は削られて周囲との高低差は無くなり、そのためか中世になると急に洪水の被害が多発しました。A層の正体はこの洪水砂（第3層）なのです。中世の人々は砂が田んぼにかぶさってはさらに耕して、田や畑を甦らせていきました。当時の農民の力強さが伝わってきます。

江戸時代以降は治水工事も進み、大きな洪水が起こることも減多になくなったようです。中世以来の農村風景を保っていたこの辺りの景観が一変するのは大正時代に鉄道が開通してからで、昭和初期にはもう土を盛って建物が建てられていました（第1層）。そして平成7年の震災をきっかけに、街は再び生まれ変わろうとしています。

このように地層はその地域の土地利用や災害の歴史を綴った履歴書ともいえます。それをひもといていく作業が発掘調査です。



再開発が進む西宮北口駅北東地区

## 「書類」の原型

さんじょうくのつぼ  
三条九ノ坪遺跡（芦屋市）

三条九ノ坪遺跡は、芦屋市三条町一帯に広がる遺跡です。震災の被害を受けたマンションの再建に先立って、平成8年9月～11月に調査を行ない、水田と川のあとが分かりました。

遺跡から出土した土器や木器などは、整理・分析作業の結果、弥生時代から奈良時代に使われていたものとわかりました。特に注目されるものに、今回ご紹介する「木簡」があります。

「木簡」は文字が書かれた木の札で、書かれている内容から当時を知る手がかりとなることが多く、大変注目される遺物です。

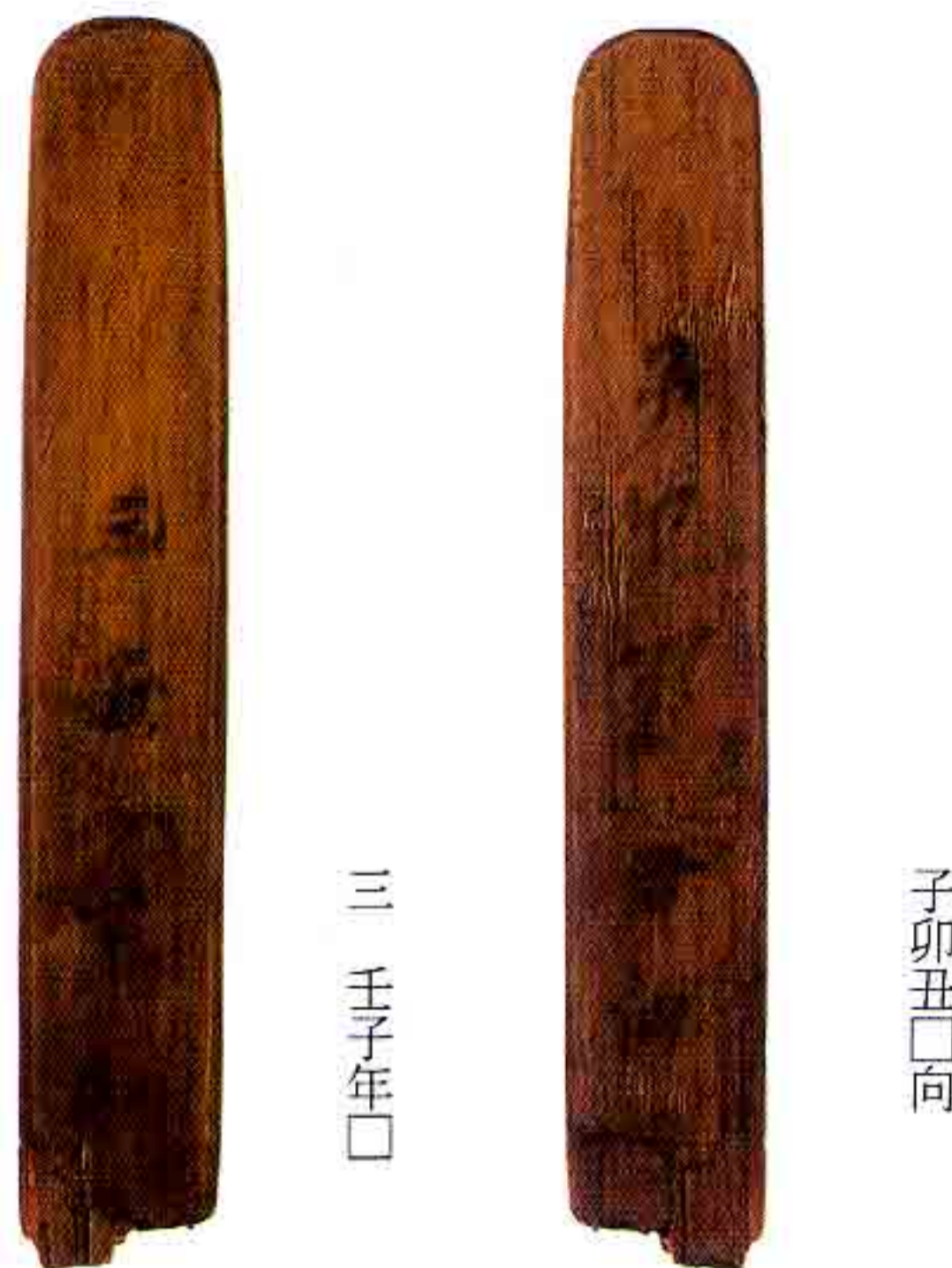
三条九ノ坪遺跡から出土した木簡は、残念ながら下の部分は失われています。長さは19.95cm、幅3.30cmの長方形で、表裏に墨書きの文字が残っていました。表面の5文字は、最後の1文字は墨が乱れて読めませんが、干支を示す「壬子」から、木簡が使われた年を記したと考えられます。干支は古代の中国で発生した年日の表わし方です。子から亥の十二支に、甲から癸の十干を組み合わせた60種で、数字の代わりに年や日を表わします。



遺跡の位置



遺跡の現状



出土した「壬子年」木簡

裏面にも干支を示す文字がみられますが、墨の痕が全体にはっきりせず、なにを書き表したものか、断定はできませんでした。

「昭和」、「平成」といった元号ではなく干支で年数を表していることから、「元号が日本に定着する以前に使われた」とする考えがあります。元号が日本に定着するのは大宝元（701）年以降とされており、それ以前の7世紀の遺跡から出土した木簡は、干支によって年代を記しているからです。

木簡の見つかった川からは、6世紀後半から7世紀にかけての土器が多く、木簡も同じ頃に使われたと考えられます。この間の「壬子」年は、孝徳天皇の時代に当たる白雉三（652）年が該当します。さらに「三 壬子年」を「即位（あるいは改元）三年で、かつ壬子の年」の意味と考えれば、年号とも矛盾がなくなります。

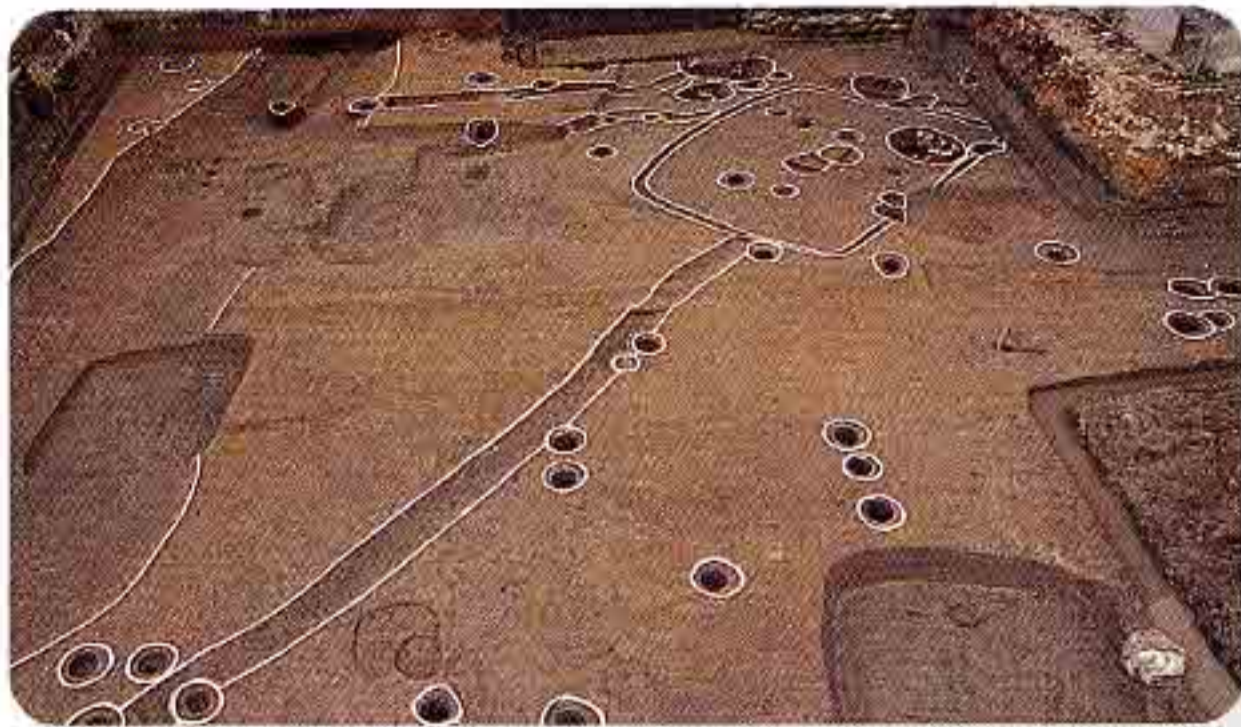
年号を記した木簡では、これまで奈良県の藤原宮跡で出土した「辛酉年」（661年）が最も古いものでしたが、この木簡が示す年代はさらに9年遡ることになります。

645年の大化改新をきっかけに、日本は中国にならった国家を目指し、記録の文書が広く用いられるようになったとされますが、この木簡は、文書のやりとりが本格化し始めた頃の様子を示す貴重な資料です。

かし  
炊きの煙り立つ家／竪穴住居群

——弥生時代後期（2世紀頃）～古墳時代中期（5世紀頃）——

日本列島がようやく国としてまとまり始めたこの頃、この辺りに再び人が暮らすようになりました。人々は竪穴住居に住み、集落の端を流れる水路の西側には水田が広がっていました。



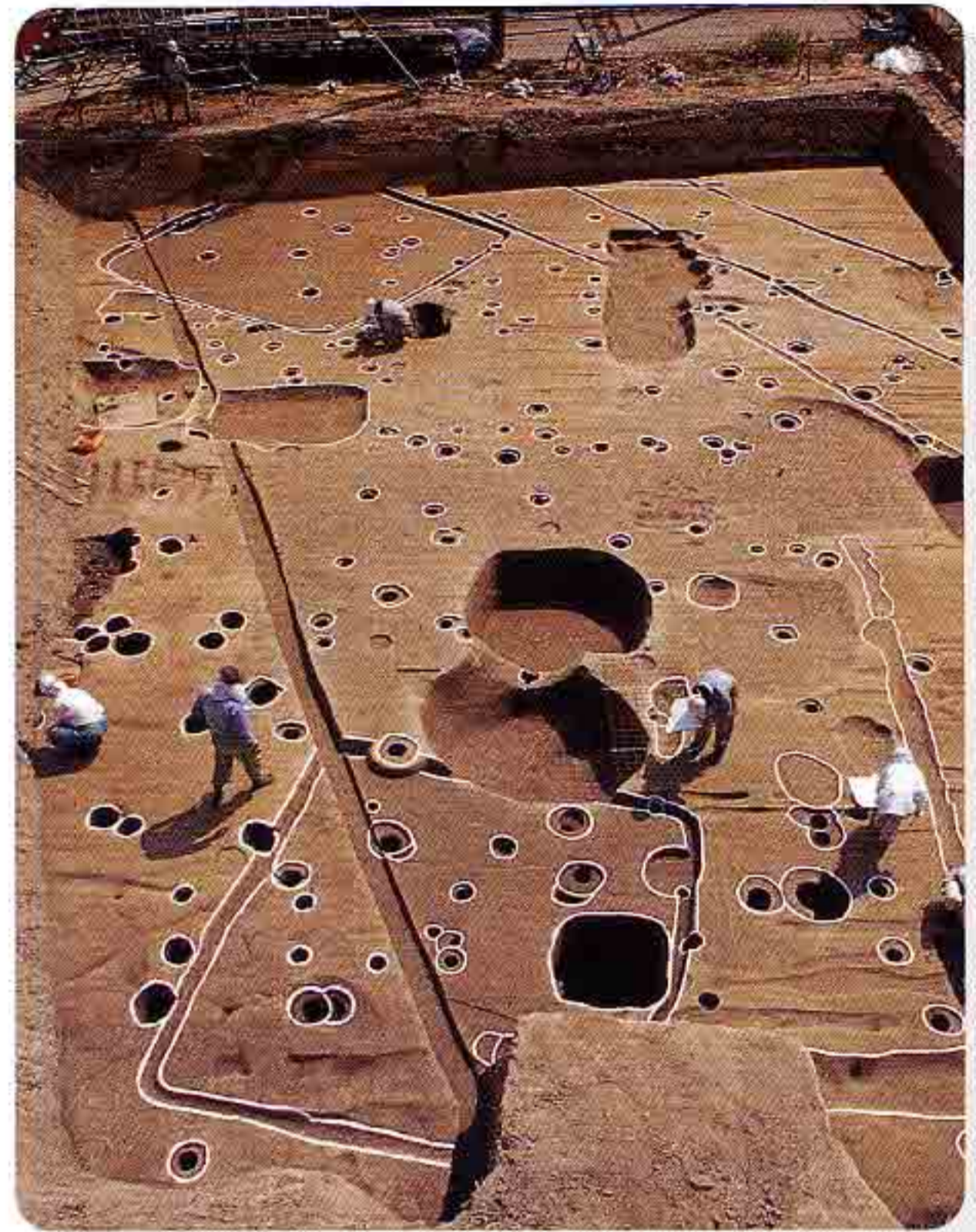
弥生時代の水路（左）と竪穴住居（右）



一度に捨てられた土器



中世の掘立柱建物群と井戸・炊事場？



古墳時代の竪穴住居と掘立柱建物

大和政権の支配者である王が巨大な前方後円墳を築いていた時代です。人々は依然として竪穴住居で寝起きしていました。家の横には物置のような小さな建物を備えていたようです。

## 中世荘園の暮らし／掘立柱建物群

——鎌倉時代（13世紀頃）——

人々は荘園の中で生活していました。見つかった建物には、周囲に雨落溝あまおちみぞを設けた母屋や別棟の小屋などがあり、その周りには井戸もありました。平たく掘り込んだ四角い穴では煮炊きをしたのでしょうか、素焼きの鍋・釜が出土しています。

土製のはがま羽釜



古代寺院？役所？大量の瓦が出土  
平成7年度 市之郷遺跡（姫路市）



中世豪族の館跡  
平成8年度 上脇遺跡（神戸市）

10年のあゆみの中で、忘れられない出来事が、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災です。すさまじい被害に、私たちは改めて自然の力の大きさを感じずにいませんでした。震災からの復興事業に伴う調査では、全国からの専門職員の応援を得ました。そして、被災市街の下に埋もれていた遺跡を、数多く調査で明らかにすることができました。

瀬戸内海から日本海に横たわる兵庫県は、地域によって様々な顔を持つ、といわれています。遺跡にも地域の特色が現れています。これからも数多くの調査を通じて、県下各地の特色と歴史を明らかにしてゆきたいと思います。ご期待ください。



但馬と播磨をつなぐ古代の交通路  
平成9年度 加都遺跡（和田山町）

#### 今年度調査の遺跡

明らかになった7～8世紀の寺院跡  
小犬丸遺跡（龍野市）

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設に伴って平成9年度から発掘調査が行われています。その調査で、瓦葺き屋根を持つ土塀（築地）の基礎が見つかるなど、これまで知られていない古代の寺院跡が明らかになりました。今年度は建物跡を調査しました。建物の周りからは、数多くの瓦が出土していますが、状況から見て、この建物の屋根からずり落ちて埋まったものと考えています。

見つかった瓦は、多くが7世紀から8世紀にかけてのものです。現在のところ、出土した瓦の大半は、他の遺跡では知られていないものです。

調査地点の東方500mのところにある、同時代の布勢駅家跡から出土した瓦の中にも、共通する瓦はほとんど見いだせません。この寺院跡が独自の瓦を使っていたことは、駅家と寺院の違いを考える上で貴重な資料といえます。



瓦の出土状況（上）と出土した軒丸瓦（下）

## トライやる・ウィーク

当事務所においても、11月9日から13日まで、神戸市立夢野中学校より6人の生徒さんを受け入れて「ふくはらきょう ひょうご福原京・兵庫津を探る」というテーマで考古学調査を体験しながら、事務所が行う仕事を体験してもらいました。

**初日** 少々緊張気味に事務所を訪れ、最初に所内を見学しました。土器の接合や実測している様子を見学すると「すごく根気のいる作業で大変そうだけど、頑張ります。」と、また「はやく、発掘がしたい」と早くも意欲十分。

**2日目** 主に兵庫津遺跡で出土した江戸時代の遺物の出土品整理作業を行いました。瓦や土器などを接合してみると、思うようにくっつかないので、少々残念そう。その後、津名郡東浦町の佃遺跡で出土し、復元された縄文土器の観察とスケッチを行いました。写真でしか見たことがない縄文土器を実際に手で触れてみた生徒さんは感動した様子。職員の書いた実測図と見比べたりして、縄文土器の考察を行いました。



縄文土器の観察とスケッチ

トライやる・ウィークとは中学2年生を対象に、学校を離れて地域で様々な体験学習を一週間行い、その体験を通じて、いきる力を育み、「心の教育」を推進することを目的とした活動です。



兵庫津遺跡での発掘体験

**3日目** 福原京と兵庫津の昔の様子に思いを馳せつつ、地図を手に兵庫区内の史跡、旧跡を踏査して記録しました。江戸時代の兵庫津の地図と現在の街を比較して、この街が大変歴史のあることを実感。しかし、山裾から兵庫港まで、一日かけて街中を歩いたので少々疲れた様子。

**4日目** 楽しみにしていた遺跡での発掘です。初めて見る遺跡を前にして、初日のように若干緊張気味。井戸の跡を掘ると、土器の破片や貝殻がみるみる出てきて驚いた様子。汗をかき泥んこになりながらも更に掘り進むと、当時のお茶碗などが出てきて大喜び。その後、魚骨や貝などの水洗資料の選別作業を行いました。ピンセットでひとつひとつ選び出す根気のいる作業なので黙り込んで作業していました。作業の終わりには、「もっと発掘作業をしたかった」と名残惜しい様子。

**最終日** 「家の近くにも多くの遺跡があることを知ってびっくり」、「発掘作業が印象に残り、どんな小さい物でも見つけた時は嬉しかった」と感想を寄せてくれました。



©Tezuka Productions



JAPAN FLORA 2000

### 編集後記

震災後に始まった発掘調査速報展も4回目を迎えました。復興事業も、復興住宅の建設から都市基盤の整備へと移りつつあるように思います。しかし、仮設住宅もまだまだ残っており、復興調査も続いています。